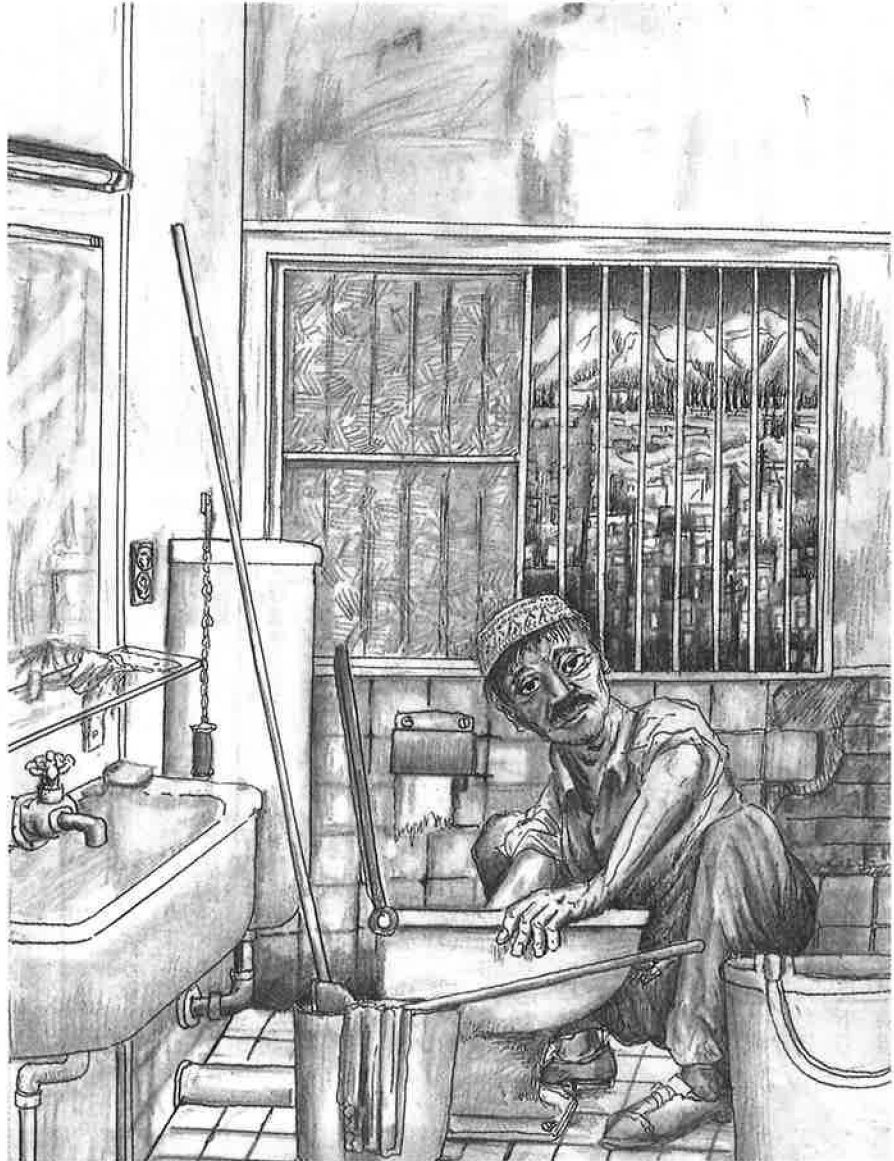


ペシャワール会報

No.75

ペシャワール会 〒810-0041 福岡市中央区
大名一丁目10-25 上村第二ビル三〇七号
電話 〇九二(七三二)二三七二
FAX 〇九二(七三二)二三七三



表紙をめぐる小さな物語 奠夫

実事業をもって平和に与す	中村 哲
一通の嘆願書	目黒 丞
作物は順調に根付いています	橋本康範
わずかな恵みを求めて生きる人々	川口拓真
中古車購入の急務帯びカールへ	黒澤 力
日本とアフガンの平和を危惧	近藤真一
会計を通じて信頼構築	中山博喜
現地語習得の道はるか	目黒 存

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

———— ペシャワール会インターネット ————

ホームページ <http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/>

電子メール peshawar@mx.mesh.ne.jp

実事業をもつて平和に与す^{くみ}

アフガン東部で15年計画の水利事業開始

PMS (ペシャワール会医療サービス) 総院長 中村哲

本格的水利事業に着手

昨年の今頃は、明るい「アフガン復興」の話題で日本中が沸いていました。「アフガン」は、そのうち、忘れ去られるだろう。だがペシャワール会の方針はこれまでも変わりがなかったし、今後も変わらないだろう」と述べたのは、その頃だったと思います。

事実その通りになりました。話題性に振り回されて付和雷同、その後アフガニスタンがどうなったか、実情を知る日本人は少ないのではないのでしょうか。ペシャワール会PMSは、昨年一月に「緑の大地」計画を発表、アフガニスタンの復興が「早魃^{かんばつ}対策Ⅱ自給自足」の農村の回復にあることを訴え続けてきました。これまで継続してきた、医療活動・飲料水源確保はそのままペースを落とさず、さらに灌漑用水の確保に力を尽くしています。この一年で、ほぼ将来事業の見通しが立ち、

二〇〇三年二月、灌漑用水確保一五カ年計画が検討され、既に実施段階に入りました。ここに会員・募金者の皆様に計画を明らかにし、ご理解を得たいと存じます。

二〇〇三年からの水利事業の概要

アフガニスタン東部、特にニングラハル州では今年も早魃^{かんばつ}の収まる心配がない。絶対的な降雪量の減少に加え、巨大な貯水槽の役割を果たしてきた高山の雪が、温暖化で速やかに解け下り、保水力が著しく低下して早魃被害を大きなものになっている。地下水位の減少も依然として続き、かなりの地域が砂漠化しつつある。

この傾向は海拔四千メートル級以下の山の麓で著しい。ニングラハル州は北にケシュマンド山脈、南にスピンガル山脈で挟まれた領域で、両山脈とも、四千数百メートル以下である。対照的に、ニングラハル州北部に隣接



ダラエ・ヌールの水利事業の竣工式でスピーチする中村医師 (2003年2月)

するクナール州では、六千、七千メートル級のヒンズークッシュ最高峰の雪解け水がクナール河を豊富に潤し、早魃は生じていない。

PMSでは北部のダラエ・ヌール渓谷で、カレーズの再生と灌漑井戸の対策を施し、約二万名の住民の生存を可能にできたが、将来を考えれば、これにも限界がある。唯一の対策は、



アフガン国境トルハムの井戸の譲渡式（2003年2月）

一、豊富なクナール河水系の利用
二、春から夏に急速に流れ下る小河川の水の蓄積

これ以外に生き残る方策は考えられない。この事情を考慮し、今後ニングラハル州で以下の対策を実施する。

1、クナール河（ヒンズークッシュ最高峰の雪に依存）右岸に用水路建設

2、同左岸に用水路建設

3、ダラエ・ヌール（ケシユマンド山系の雪に依存）中流域に井堰、堤の建設

4、ソルフロッド河（スピンガル山系の雪に依存）流域の井堰、溜池、堤

5、ダラエ・ヌール地下水路（カレーズ）の補強

6、灌漑井戸による地下水の利用

なお、一年前に二〇〇万人と伝えられたパキスタンのアフガン難民のうち一七〇万人が帰還したと発表されたが、帰還計画は二〇〇三年一月を以って一旦停止した。だが不思議な事に、依然として難民一八〇万人がパキスタンに居る（UNHCR）。これは主に、越冬できぬ難民が戻ってきたためで、将来とも、早魃地帯の農村復興なしには、減ることはない。「政情不安」が理由で国際救援が本格化するの、なお時間を要する。または来ないであろう。

今後、上記の対策を講ずる事で、少なくともアフガン東部数十万人の難民化を防止、または呼び戻す事が可能である。他に誰もやらなければ、手をつけるものから早急に実施すべきである。

1 クナール河右岸の用水路建設

① 地域…ニングラハル州北部・クズクナール地方（ダラエ・ヌール渓谷最下流域・

シェイワ郡）

② 用水路の概要…クナール州南部のヌールガル（クナール河右岸）から側流をダラエ・ヌール下流域へ引き込む。全長一二・六キロメートル、幅三〜四m。流量毎秒一・五トン

③ 耕作可能面積…最低約六〇〇町歩。五千家族（約五万人）以上が居住可能。

④ 施工期間…二〇〇三年三月から五年間

⑤ 実施段階は以下の通り…

・二〇〇三〜四年……主に現地の伝統工法で突貫作業、全長二キロメートルを一挙に開通。

・二〇〇五年以後……三年をかけて、数キロメートルずつ半永久的な水路に仕上げる。

⑥ 総工費は約一億二千万円（二〇〇三〜四年…約七六〇〇万円）へ機材ら初期投資、職員増員、二〇〇五年以後三年間。年間一二〇〇万円）

2 クナール河左岸用水路

① 地域…ニングラハル州北部・ハースクナール地方

② 用水路の概要…クナール河のヌールガル対岸から側流を引き込み、既存の水路と連結、安定的な灌漑用水の確保を図る。全長約二キロメートル以下、幅四メートル



用水路建設のための測量を行う現地スタッフ

- ル。
- ③耕作可能面積…合計約一五〇町歩。推定二万人が潤う。
- ④施工期間…二〇〇四年十二月から二年間
- ⑤総工費…約一五〇〇万円
- 3 ダラエ・ヌール中流域の井堰、堤建設
- ①地域…ニングラハル州北部・ダラエ・ヌール地方

②用水施設の概要…急速な濁流の土石流を防ぎ、階段状に貯水して緩流とし、既存の小水路（ジューイ）の水流を安定的に確保、末端は堤として貯水。

・一番堰…幅上方二m、底部一〇m、高さ五m、堰幅五〇m、溪流長約八〇mに貯水。土石を防止、しゅんせつ作業を容易にする。

・二番堰…幅上方三m、底部一五m、高さ八m、堰幅五五m、溪流長約二〇〇mに貯水。

・三番堰…幅上方二m、底部八m、高さ約六m、堰幅七m、溪流長一五〇mを堰する。

・第二・第三ダムに水門を設け、溜池（堤）として貯水する。貯水を確認してから周辺に落葉樹の林を造成する。

③耕作可能面積…調査中。既存の小水路の安定供給と増加だけで、溪谷中流域の大半（約八百家族）をカバーできる。

④施工期間…二〇〇三年八月から三年間、〇三年は一番、二番堰、二〇〇四～五年以内に三番堰。造林、傾斜を利用して果樹園、茶園の試み。その後の候補地は十分な調査、住民との協力によって決定。

⑤総工費…約二千万円（三年間）

4 ソルフロッド河流域の治水事業（井堰、

溜池、堤

今後最大の取り組みとなるが、急がない。現在、米軍や地方軍閥の活動で、動きがつかない。かつ広大な領域なので、先ず測量、正確な地理を把握する。当分、若干名の測量班が調査。上記ダラエ・ヌール井堰での経験を蓄積して備える。「小規模・多数」を原則とし、村民が誰でも真似できるように方法を工夫。二年後を期して臥薪嘗胆、資金を蓄え、大攻勢に出る。五〇万人の自給自足を目指す。

5 ダラエ・ヌール地下水路（カレズ）の補強

急激な鉄砲水などの影響で内壁が剥落、使えなくなったものが増えている。より完璧で頑丈な壁面と天井の補強が重要。余力を以って、年間数ヶ所づつ手がける。

6 灌漑井戸

既にダラエ・ヌール溪谷下流で手がけたものの五本、〇三年四月中に全て完了。これによって年内に約二五〇三〇町歩が灌漑された。新たに二ヶ所が選ばれ、続けて作業に入る。

現段階の進行状況

以上、計画6（灌漑井戸）は成功裏に進行中。計画1（タナール河右岸水路）、計画3

(ダラエ・ヌール井堰)は、一五年計画の第一弾として直ちに実施し、砂漠化した耕作地を緑化、難民化した農民を呼び戻すと共に、新たな開墾や牧草地を期待できる。これによって推定一〇万人前後の難民帰還と自給自足を目指している。ペシャワール会で過去最大の挑戦だと言える。

井堰は比較的小規模だが、近い将来のソルフロッド河治水のカギを握っている。かつ、植林などと組み合せて保水力、有機質の堆積を期待でき、今後の農業・畜産計画にも寄与する。経験を蓄積し、より大規模なソルフロッド河流域治水事業に備える。

こうして耕作可能にして村民が戻った後に、農業・医療関係の本格的な事業が可能で、その逆はない。計画1と3は、二月五日、正式にアフガン政府・東部地区開発省の許可を取得、内務省が治安を保障、既に具体的な立案・予定機材購入を終え、三月十九日、地区住民(長老会)代表、アフガン東部政府代表、ペシャワール会PMS首脳陣ら二〇〇名が列席、竣工式が行われた。

飲料水源事業

二〇〇三年四月一日現在、総作業地九六五、うち八七五ヶ所で水利用が可能。三〇万人の離村が防止されていると推測される。しかし、

水位の低下による涸れ井戸が続出、再生作業を含めると、仕事量は一年で倍増している。水の出た地域では帰郷者が増え、需要が更に増している。この面でも手を抜くことができない。

なお、一年八ヶ月を費やしたトルハム国境のボーリング井戸は一基が完成、二月八日、正式にアフガン政府企画省東部担当官に受け渡された。譲渡式にはPMS、アフガン政府、住民の各代表が集まり、「歴史的偉業だ」と皆で喜びあつた。バザールへの給水は、アフガン政府と住民自治会が話して決定、住民が給水管を負担、PMSは技術援助だけして維持を任せる。第二号基も、四月中に同様の方式で譲渡される。

*

*

*

以上が主な水源事業の状況ですが、医療団体が飲料水源事業に加えて、本格的な農業土木に乗り出すという、稀有な展開となりました。しかし、これは決して唐突な変身ではありません。実際、ダラエ・ヌール診療所では、井戸数の増加に比例して、子供の下痢症や腸管感染症(腸チフス、赤痢、流行性肝炎)が著しく減少、診療所職員も驚くほどののです。更に、栄養失調が病気の背景にあるので、農業生産を増やせば、必ずや良い健康状態を生み出す力になるでしょう。

沖縄ピース・クリニック

ダラエ・ピースの「沖縄ピース・クリニック」の方は、モルタルを塗って乾くのを待つばかりとなりました。遅れの主な原因は、米軍の無意味な軍事活動で輸送などが滞ったことです。五月に移転できる見通しですが、壁の塗装などは乾く時間を長く置いたほうが良いので、七月か八月に記念式を予定しています。



完成を待つオキナワ・ピース・クリニック

イラク攻撃の影響もあって、米兵はアサダバードというクナール州の州都にある基地の中でじっとしています。ほとんど地上を移動せず、車両の修理まで空中輸送で行っていました。誰が襲撃するか分からないのです。近くの橋の真ん中に穴が開いているので、尋ねると何者かが地雷を仕掛け、米軍の通過するタイミングに爆破、米兵三名が死亡したとの事です。診療所付近でジープ四台に分乗した米兵とすれ違いましたが、みな二〇歳代の若者で、異様に色白でひ弱に見えました。おそらく、基地の中に閉じこもり、野外に出ることがないせいでしょう。空からの飛び道具でしか戦ができないのです。白兵戦などは問題にならぬくらい頼りなげに思いました。



アフガン東部の試験農場

米軍が去れば、一日で現政権が崩壊すると皆信じています。最近の傾向は、米兵とその協力者だけのが絞られて襲撃が活発化していることです。

私たちは、このような馬鹿げた戦争が実情を無視して正当化され、嵐のように駆け抜けた「アフガン復興ブーム」の結末に怒りを感じます。第一、早魃で皆が難民化しているのに、この数年間、その実態に迫る報告は殆どなく、あげくが爆弾を落としたり、政治的な動きばかりが伝えられてきました。だまされてはいけません。アフガン復興は遠い夢のようです。

先日カブールの反米デモでは、日章旗が英米の国旗と共に焼かれました。あれほど親日的な国であったのに、戦争協力で日本は「米国のボチ公」との認識が広まりつつあります。「対テロ戦争」はテロリストを大量生産しました。そのツケが日本国民の頭上にのしかかることは時間の問題かもしれません。カネと暴力に頼り、人としての誇りやモラルを失った政治指導者たちが、戦争犯罪人として裁かれるのは歴史の鉄則です。

忍耐も限界に近づいています。喋ったり、批評するだけの時期はもはや過ぎました。負け犬の遠吠えでは事態は変わりません。平和はもつと積極的な力であるべきです。私たちは実事業を完遂し、人の命を守りぬき、理不

尽な暴力主義と対決したいと考えています。

中村哲（なかもつてつ）

九州大学医学部卒。専門Ⅱ神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の診療所勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都のベシャワールに赴任。以来十九年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、主に貧民層の診療に携わる。

九八年には基地病院PMSをベシャワールに建設、パキスタン山岳部に三つの診療所も併せ持つ。一九八六年からはアフガン難民のためのプロジェクトを立ち上げ、現在アフガン無医地区山岳部に三つの診療所を設立して、アフガン人の無料診療にもあたっている。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、辺境山岳部へも定期的に移動診療を行っている。二〇〇〇年からは中央アジア、特にアフガン国内を襲った大早魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。二千の水源確保を目指す）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地プロジェクト」



を継続、今春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約二十万人。

竣工式挨拶

ペシャワール会=PMS代表 中村哲

アサラーマレイコム。お集まりの方々に挨拶申し上げます。

本日、こうして皆さんのための水路建設が始まることを嬉しく思います。この仕事が多くのアフガン人に幸せをもたらすことを祈ります。

水路の概要について説明いたします。

水路は、ジャリババ村からシェイワ郡まで全長12キロメートル、3,000ジェリブ（約600ヘクタール）の灌漑を目指します。これによる予想小麦生産高は約6,000から9,000トンを見込んでいます。すなわち、最低約5万名以上が生活できるようになります。これを2-3年かけて完成いたします。

アフガニстанは今最も困難な時を迎えています。旱魃と内戦で人々は疲れきっています。新政府を作るのにも、もっと時間が必要です。

実際は、政治のことは少しも分かりません。私もまた外国人です。しかし、この地に20年近く居て、この目でいろんなことを見てきました。外国人が来ては去り、来ては去り、どんな「援助」をしたかです。その結末は、人々がよく知っています。

過去の経験から私が確信するのは、本当の支援とは、アフガン人のために実際に何が必要なのかを見て、彼ら自身のためになることを実行することです。

その一環として、この計画が今始まりました。私たちPMSの仕事は国連や政府援助のように大きくないかもしれませんが、これによって、自らの故郷が立ち直り、多くのアフガン人が幸せとなり、自らの生活ができ、自らの文化を保ち、誇りと独立を保ちうると、希望するものであります。

PMSはこのために支援し続けるでしょう。これが我々のジハード（聖戦）であります。

最後に、皆様のご協力とご助力に感謝申し上げます。

どうもありがとうございました。

アフガニстан、ゼンダバード（万歳）！

地元長老の謝辞（要旨）

クズクナール地域長老会=住民代表 モハマッド・アクバル氏

アフガニстанは30年に及ぶ戦火で荒廃しました。だが、この中にあって私たちアフガン人を助けてきたドクターサーブ中村に感謝します。共産政権に対する聖戦時代から、その活動は続いています。誰がああ困難な時代に、診療活動ができたでしょうか。ドクターサーブはパキスタンにらいい病院を建て、自転車をごくように、少しずつ、日本や現地を往来し、日本側の支援団体を組織し、特にアフガン人のために力を尽くしてくれました。あちこちに診療所を作り、荒れた土地に水を注いで緑地に変え、その支援は大きくなりました。

今回12キロメートルの水路ができ、多くの人々が住めることは非常に嬉しいことです。もちろん、ここには多くの地域の指導者が集まっています。水路はブディアライ村、シェイワを潤しますが、近い将来、バスードを含む全ての北部ニングラハル州に活動が広がるでしょう。ペシャワール会=PMSは水路、井堰も手がけ、この砂漠を緑地に戻し、安心して人々が住めるようにしようとしています。中村先生はアフガンの人々を救援するために席を暖める暇もありません。私たちは今、砂漠化した故郷の中で無為に過ごすべきでしょうか。

多くの人々が住めるようになることを感謝し、この仕事に協力を惜しまないでしょう。

*ワーカー通信

一通の嘆願書

水計画担当・ジャラバード事務所

目黒 丞

井戸の給水方法をめぐって

日本でご支援くださっている皆様、いかがお過ごしでしょうか。

先日、ドラエヌールの五本目の灌漑井戸の周囲の住民から一通の嘆願書が届けられました。その内容はペシャワール会の掘った井戸からの水の配給方法をペシャワール会自身ではっきり決めてほしい、というものでした。

この五本目の井戸だけは二つ以上の地域にまたがる中間地点にあり、他の四本の井戸は問題ないのですが、この場所では水を巡って地域間の争いが起こる可能性を持っていました。この時点ではまだポンプなども完成しておらず、完成後にきちんとした配水システムを作るつもりでしたが、その前に水争いを避けたいと申し出てきたのです。

驚いたのは嘆願書にはそれぞれの地域の責任者の名前と署名があり、一部の人間が他の者を誹謗

中傷するために書かれた物ではない事でした。ドラエヌールに限らず、アフガニスタンでは隣の村と殺し合いをすることさえあるほど、独立性が強く、血縁と地縁を重視し、排他性の強い人々がほとんどです。署名者の中には私が知っているだけでも仲の悪い村同士の責任者も含まれていました。

水は財産

アフガニスタンでは水は財産です。

カレーズを個人的に所有しているものは地主以上の収入と権力を手にすることすらできる社会です。彼らがペシャワール会の我々に判断を委ねたという事は、我々を中立的かつ公平な第三者として認識したという事です。我々は完成後に住民自身によるジルガ（長老会議）を開催し、ペシャワール会の代表者が立会人として出席することを提案し、長老や住民も承諾してくれました。この事はペシャワール会と住民の間の信頼関係を示す良い例だといえると思います。

しかしながら楽観的に「絶対の信頼関係がある」と考えているわけではありません。アメリカによるアフガニスタンへの空爆の際、ペシャワール会以外の国連関係や他のNGOのほとんどが住民による略奪を受けました。数年前にクリントン前大統領がアフガニスタンとスーダンに巡航ミサイルを撃ち込んだ際にも、略奪がありました。ほとんどのNGOや外国人が逃げ出し、「どうせ戻らないのであれば……」と貧しい人々が備品を奪って



PMSの井戸からあふれ出た水

生活のために売り払ってしまったのです。我々の事務所が略奪されなかったのは、何があっても活動を継続するという姿勢を示し続けたためでした。

うすれゆく親日感情の中で

現在、アチン郡では作業終了が近づき規模が縮小されつつある事と、バキスタンより戻ったばかりの元難民だった住民がペシャワール会の活動を知らないため、日本人スタッフを派遣しないよう



ダラエ・ヌールの井堰建設予定地に立つ中村医師と目黒さん

にしています。さらにイラク攻撃が始まってしまい、また活動地域以外の住民は我々の活動を知らないため、安全を考えて日本人の派遣を控えています。アチン郡、ロダット郡など、活動の歴史の浅い地域はしばらく様子を見ようと考えています。信頼関係と人々の生活の利害は表裏一体だと思います。援助団体が活動を終了すれば、彼らアフガニスタン人にとっては、ただの通りすがりの外国

人と変わりがなくなることすらありえるのです。

日本のニュース、ラジオで既報

ただ、ダラエヌールに関しては中村先生とベシヤワール会が十年以上もの間、どんなことがあっても医療活動を続けてきたという実績が信頼関係の根本にあると感じています。今のジャラバード周辺の状況を見て、略奪や暴動などが起こる気配はまったくと言っていいほどありませんが、最悪の場合として、治安が悪化して陸路でパキスタン側への避難が不可能になったとしたら全日本人をダラエヌールに避難させる事を考えています。ダラエヌールの住民ならば命がけで我々を守ってくれると信じるからです。

信頼関係を築くには想像以上の時間がかかります。二十年近くかけて皆さんのご支援により築き上げた信頼関係が、我々現地の日本人スタッフを守ってくれています。

アフガニスタンではラジオのBBC放送が普及しており日本政府や首相の発言まで私より早く知っています。日本政府がアメリカの武力行使についてすぐに支持した事すら有名です。

それでも我々が変わらず活動を続けることによって、ダラエヌールの住民や現地スタッフのように「日本の国民は戦争を望んでいない、同じ人類の平和を望んでいる」と、いつかすべてのアフガニスタン人に知ってもらいたいと願っています。

今後が変わらぬご支援と、罪もなく苦しむ人々の平和への祈りをよろしくお願い致します。

冀夫

甲斐大策

東の空に陽の出の気配は未だ見えない。満天の星である。薄い霧の下、カーブルは眠っている。屋上での祈りを終え、ゴラマサンは、小さく身を震わせた。一階台所脇の小部屋で、仕事者のまま機にたな。アザーンを耳に、微睡んで聞もなく、バシエトゥンのマネージャー、ワズ・ハーンの大声が上階から降ってきた。「ゴラマサン……、四階のドヨム(二号)室のパイプがあ……」

またか、という気もない。あのシーク教徒の印度商人が泊った時予想していた。縫れた蝶ネクタイを外し、シャツの袖を捲くり上げながらゴラマサンは、四階へ向った。

王政時代、父は市の清掃員だった。ローガル出身のハザラにとつて思われた仕事といえた。毎朝八時、二十名の仲間と王宮前へ行き、サッカー場もある広場に早朝、人々がしゃがみこんでは残した無慮数百の人糞をスコップで掬い、トラック荷台に敷いた泥に抛り上げる。トラックと入れ違いに、果物や野菜を背にした驢馬や、飲みものや軽食を積んだ手押し車が続々と広場へ入り、市が開かれるのだった。

ゴスワラア(糞拾い)と蔑む者がいても父は超然としていた。

「死人と遺族に導師、戦いに兵士、病人に医者、貧乏人に金貸し……皆、必要で大切な人だ。だが、痛みや苦しみや悲しさあつての仕事、私の仕事は違う。世の中、どうなるうと人間は糞をする。生きてる証しだ。スコップを地面に向けて度神様が背中を押してくれる、それが判るんだ……」

五十才で父が退職した頃、兵役中に知ったホテル・オーナーの息子との縁で、安宿バーズ・ホテルにゴラマサンは職を得た。そして以前から決っていたように、主な仕事は、年中詰まる水洗便所のパイプ掃除だった。

薄水を破り、便器の奥深く手を差し入れる。パイプの奥に詰った諸々の汚物を素手で取り出し、また押し込む。時々思う。水洗は、眼の前のものを見えなくするだけで、地上から消したわけではない。流れたものは、どこかに在る。ゴラマサンの質量不変の法則である。

大地に在るものは、獣や虫、光や風が泥に還す。それを汚い、と感じたことはない。

父も子もモスクには決して入らない。しかし、日夜くり返すその祈りは深い。

作物は順調に根付いています

高橋修氏（農業指導員）への手紙

農業計画担当 橋本康範

前略

高橋さん、すっかり春めいた日本でいかがお過ごしでしょうか。ここガラエヌールもさらに暖かさを増し、もう暑いくらいで日本の初夏の陽気です。高橋さんが来られたときに播いたとうもろこし、ソルゴーからも芽が始め、挿し木したブドウ、移植した百本のお茶からも新芽が顔を出し順調に根付いています。今回の高橋さんの訪問で私は高橋さんと三度現地で一緒に活動したことになります。

初めて高橋さんとお会いし、活動したのは去年の七月でした。あの時はアフガニスタンでも一番暑い時期で、日本では到底体験できない恐ろしくイタイ日差しと熱風が襲う中の活動となりました。そんな中、一日中畑での仕事は並大抵の体力がないと堪えられません。それでも高橋さんは跳ぶように畑を駆け回り、土の様子や灌水について、大豆やとうもろこし、お茶の栽培について、何も知らない私に一つ一つ丁寧に、時には実践して教えてくださいました。また、パイロットファームの

農家と仕事をするのが初めてだった私を氣遣い、私のペースに合わせて活動してくださいました。そして、一切の疲れも見せず責任感強く一つ一つの活動を消化していく高橋さんの姿に強く胸を打たれました。

それからもう私は高橋さんのとりこになりました。二度目は昨年九月末でした。このとき高橋さんは七十二歳の誕生日をガラエヌールで迎えられました。パイロットファームの農家から手作りの花の首飾りを贈ってもらったり、農業計画、水源確保のエンジニア、クリニクのスタッフみんなガラエヌールのクリニクに集まり、高橋さんの誕生日を祝ってくれました。そしてそのお返しに高橋さんは日本の民謡を力いっぱい歌いました。

今回三月の訪問では、ぶどうの苗を予想以上にパキスタンの農業研究所から譲り受けたとき、高橋さんは担当の方に抱き付いて喜んでいました。また私自身今回は、高橋さんと一緒にサテライトファーマーの面接をしたり、今後奨励していく技術・作物・品種について絞り込んだりと、そんな活動の中でほんの少し高橋さんの考えに近づいて互いに話をする事が出来たのでは、と一人うれしく思っていました。

いつも私は高橋さんがアフガニスタンに来るのを心待ちにしています。高橋さんと一緒に活動していると楽しくて仕方がないのです。そしてなぜかほっとします。たった一度の人生、それをどう生きるべきか自分はいつも答えを求め、しかし、一生かけても答えが出ないような気がしています。

しかし、高橋さんと一緒にいるとなんだかその答えをそと、しかし身体を張って教えてくれているような気がしてなりません。だからほっとするのもかもしれません。

次回お会いできるのは七月頃でしょうか。またあの恐ろしい暑さの中の再会となりますね。それでもやはり高橋さんはあの暑さをものともせず、また畑を跳ぶように駆け回りながら活動なさることと思います。風がどうと吹いたブディアライの谷で、大きなソルゴーに囲まれて涙を流していた高橋さんの姿が私にとってもない力を与えてくれています。今後もしっかり高橋さんに付いて行けるよう、そしてなお一層高橋さんと深い話が出るよう日々努力していこうと思います。では互いにくれぐれも健康には気をつけ、また笑って再会しましょう。

ガラエヌールの試験農場にて

草々

（追伸）

高橋さんはよく冗談を交えながら奥さんの話をしてくれます。アフガニスタンではいつも遠く離れた、とても安全とはいえない土地に来ての活動によって奥さんに心配をかけていることを気にかけていらつやいます。そして、日本に残してきた奥さんのことをとても心配なさっています。どうか奥さんにもよろしくお伝えください。そしていつもアフガニスタンへ呼び出してしまつてすみませんと、この場を借りてお詫び申し上げます。

わずかな恵みを求めて 生きる人々

PMS現地連絡員（ジャララバード事務所）

川口拓真

変わらぬ営み

ヒンズークシユ山脈と岩塊群が覆うアフガニスタン東部一帯。短い冬が去り、春愁に浸る暇もなく、猛烈な初夏の漂いをじりじりと感じつつあります。そのような季節の移ろいのなかでも、人々は営々と変わらぬ光景を我々に見せてくれます。自然の創りだした掟に逆らうことなく、脈々と時だけが流れているようです。

依然として、旱魃の被害が治まらないアフガニスタンでは、例年の降雪が減少傾向にあるようです。とはいえ、今冬も、其々の山稜に降雪がありました。それ以外の千メートル級の小さな山々には、降雪を確認することはありませんでした。

とにかく現地では雨が極端に少な過ぎる、ということは確かなことです。

クナール川の源流は、隣のパキスタンのラシュトなど、辺境地から遙々流れてきて、アフガニスタン・クナール州内で本流となって現われます。大部分が、冬の雪解け水です。いくつもの支流が集まって本流に注ぎ込む、東部一帯の代表的な河

川となっています。我々が活動しているニングラハル州の一部とドラエヌール付近を掠め、Uターインをするように、またパキスタンに戻ります。そしてパキスタン内で大小の河川と合流し、大河インダスを形成していきます。水量は一年を通して平均的ではなく、気温が高い夏季のある一定期間のみ膨大に流れ過ぎ去ります。

緑と褐色のコントラスト

私が住んでいる北九州には、遠賀川という一級河川が流れています。下流域では最大幅が五百メートル近くはあります。川幅だけで比較すると、現在私が住んでいるジャララバード市内のクナール川は、その倍以上に大きな川です。流域には多くの住民が暮らしています。

昨年の秋季から冬季にかけて、クナール川の水量が少なくなりました。ジャララバード近郊あたりでは、歩いて渡れる程までに減っていました。市内を外れると、人工的な治水施設がほとんどなく、川から離れば離れるほど、川の恵みを受けることが難しくなります。もちろん日本のように、高度化された治水設備はありません。飲料水も灌漑用水も、自然環境が造りだした摂理に大きく依存しています。

ニングラハル州都ジャララバードよりドラエヌールまでの道中は、幾つかの村を通り抜け辿り着きます。クナール川の恵みを受けて緑豊かな地域があり、其々の村、其々の集落、其々の家からなる、素朴な営みがあります。子供から大人まで畑仕事や牛の飼育に忙しく、緑豊かな光景が珍しく

ありません。

しかし、それらと数キロと離れていない、河川から離れた村になると、景色がかなり違ってきます。家が立ち並んではいるけれども、緑豊かな作物が見当たらず、草木もそれほど生えていません。石コロだらけの土地に、慎ましい生活をしている家が数軒。余りにも狭い範囲で、豊かな土地、貧しい土地の境界がくっきりと見てとれます。ひどいところでは数百メートルしか離れていません。緑と茶褐色の強いコントラストが顕著に現れています。

不条理の帰結

清潔でない川の水をそのまま飲むと、外国人に限らず現地の人々も、お腹を壊しやすくなるようです。身体に悪影響を与える水は、衛生上良いものではありません。清潔な飲料水を確保することで、病気になる患者を減らすことができます、と中村先生は教えてくださいました。川の恵みは自然の恵み、流域に流れる地下水も灌漑用水も、とても貴重な天然資源です。

人為的な不条理の拡大が、暴掠を極め尽くしたあとに、なにが失われ、なにが残り、そしてなにが生まれるのかを、絶えず見極めることが求められると思っています。

多くの警鐘が乱打されるなかでも、まずは自然と共存する道を、平和を摸索していかなければならないと強く感じています。僅かな恵みを得るために、今後も現地と共に活動が続けていきたいと思っています。

中古車購入の 急務帯びカーブルへ

PMS現地連絡員（ジャララバード事務所）

黒澤力

一大イベント

現在、アフガニスタンにおける我々の活動において、カーブルというのはいやや遠い地域である。地図で見るとジャララバードとは州として隣り合わせなのだが、活動現場としてのクリニクや女性ワークシヨップは既に終了したし、日本人スタッフのアフガンヴィザ延長手続きも、今ではジャララバードで行うことができる。

そんなカーブルへ、三月の頭に急遽派遣されることとなった。新計画に際して必要な、中古車の購入のためである。その仕事を担当するようになった二月以降、トルハムを含めジャララバードの中古車店を探し続けてきたものの、空爆以降の物価上昇とあわせ、我々の予算内に収まるものはなかなか見つからなかった。

中古車の購入は、こちらでは一大イベントである。滞在が半年のひよっこ日本人の私に務まるはずもない。自動車を選定するドライバーのアドバイザー・ハミッド、タフ・ネゴシエーターのジア副院長、そしてドライバーのワヒードに私、というメ

ンバーで、これでも随分良くなったというデコボコ道を、カーブルへ向けて発った。

三時間ほどの道を経て、いよいよ首都が近いところ、なお山岳地帯が続く戦車の残骸がゴロゴロしているのに驚かされる。アフガン出身のジア先生いわく、地元の人々が戦争を伝えるために取って残しているのだ、という。山からスーッと平野へ降りて行き、気がついたら市内に入っていた。

物価は軒並み急騰

中国の地方都市を想起させる旧共産圏的な整然とした街並みも見られるが、成程噂に聞いていた交通渋滞と、あちこちに張り出したブラックのような建物、そしてどんよりした天気の違いで、どうにも雑然とした印象を受ける。ともあれさすがの首都、やはり大きい。

われわれ一行は宿を求めこの大都市をさまよった。が、世界の注目を浴びてからこのかた外国人がお金を落として行った結果、首都の物価は軒並み急上昇したという。一般的なホテルでさえ一人四十米ドルを取るところにあつて、我々は結局四人で八百円ほどの大衆宿に身を投じることとなった。若い私やドライバーはともかく、副院長までがこの四人部屋というのはいかがなものか、という私の心配をよそに、ジア先生は「外国人がいなければ四人で四百円だったさうだぞ」とお茶目な笑みすら浮かべておられた。

出発前にスタッフ達から「カーブルは寒いから気を付けろ」といわれただけのことはあり、翌朝

は雪が降った。ぬかるむ道を一軒一軒探し、何台もの車を試乗してみたが、結局目が高いアブドル・ハミッドを満足させる車を見つけることはできなかった。これでは致し方あるまい、とりあえずは日雇いのレンタカーで始めるしかなく、予想外の結果に肩を落として、昨晚と同じ大衆宿に帰る。

あまりの短い滞在のせめてもの記念にと、現時点では国内で唯一機能しているという郵便局へいつてみた。手紙を投函すると、なんだかわいらしい切手を貼るので、何枚かみせてもらった。破壊されたバーミヤン遺跡追悼のものから一九六四年のザヒルシャー元国王のものまで、そのまま現役で供されているのが興味深い。

ブルカを着用せずに闊歩する女性も、洋服をまとった若者も、そして有象無象の外国NGOの人々から二十一カ国よりなる国際治安部隊の兵士まで、この街はすべてを受け入れている感がある。報告等を考えパソコンとともに持ち込んだ電流安定器が無用の長物となるほどに電力供給が極端に不足していたが、このような混沌とした中から、新しい平和と安定が生み出されて行くことを祈念してやまない。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の発送費に、年間百万円以上がかったっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです（古切手不可）

日本とアフガンの

平和を危惧

PMS現地連絡員（ジャララバード事務所）

近藤真一

最初は「金魚のフン」

現在ペシャワール会（PMS）ジャララバードオフィススタッフは仕事が忙しく、てんでこ舞いである。それと言うのも中村先生が、長い間胸のうちであたためておられた灌漑水路建造計画が二〇〇三年二月に突然、構想段階から実行段階へとシフトしていったからだ。全長十二キロメートルという長大な灌漑水路で約五万人の人々の生きる糧になるという代物である。元来PMSは医療NGOであると私は思っていたが、いまでは九百本以上の井戸を掘り、農業を始め、次は長大な灌漑水路を建造しようとしている。PMSの頭である中村先生は怪物だ。

私はまだアフガニスタンに来て二ヶ月程度しか経っていないのだが、まだ右も左も分らない状態の時に、今年から十二キロメートルの灌漑水路を作り始めると聞いた。すでに周りの日本人の先輩方は忙しい毎日を過ごし、仕事仕事の毎日だった。私はといえばアフガニスタンの文化や国民性について何も知らない為、金魚のフンのように

先輩の後に付いて行く事しか出来なかった。日本とは文化や社会、言葉の違う国で我々外国人が現地の人達と仕事をするという事は想像以上に難しい事であり、日本ではすぐに片が付くような仕事でも、なかなか解決出来ないような事が多々あった。先輩方はその事を良く心得ており、どうにか三月十九日、灌漑水路のセレモニー（鍬入れ式）まで辿り着いたのだった。セレモニー当日も、灌漑水路を作る地元の人達の協力や、いつも以上に一生懸命働く現地人スタッフのおかげで、事は順調に運び、セレモニーは無事終了した。

平和の祈り

その後、肩の力が抜けてしまった私は現地人スタッフと一緒に事務所に戻り、彼らと共にお茶を飲みながらくつろいでいた。ちょこちょこっと周りの人達と話をした後、このお茶うまいなあと、のんきに感心していた。すると突然、周りの人達がお祈りをしだしたのである。お茶に気を取られていた私も焦ってお祈りをした。しかし、なぜ急にお祈りをしだしたのだろうと不思議に思ったので、片言のパシトゥー語で彼らに質問した。答えはこうである。

「イラク攻撃が始まらないようにお祈りをしたのだ」。

あの時、戦争が始まらないようにお祈りをしていた彼らは戦争の始った今、どんな気持ちでいるのだろうか。さらに、日本がこの戦争に荷担しているという事を知った時、彼らは我々日本人の事をどう思うのだろうか。ペシャワール会は日本の支

援者のもと、これからも努力を惜しまないだろう。しかし、その努力は現地の人々の理解と協力がなければ無意味なものとなると私は思う。これから灌漑水路建造計画は本格的に始動するのだが、私は少し不安である。戦争が長引けば長引くほど、現地人と日本人との間に確執が生じるのではなからうか。取り越し苦労ならいいのだが。



竣工式での鍬入れの様子

会計を通じて信頼構築

PMS会計事務担当

中山博喜

「イクラムさん」だけで四人！

最近、よく夢を見る。

私が生まれてから今まで夢はずっと見てきたわけだが、最近の夢は登場人物が変わってきた。私と一緒に働いている現地の人々が出現しだしたのだ。夢の中でも彼等はヤッパリ現地語である。夢だからといって彼等が日本語を話してくれるような嬉しいサービスはない。しかし意思の疎通は現実の世界以上にスムーズ、かつクリアー、さすが「夢」である。

バキスタンに来てすぐの頃、現地の人々の顔はみんな同じに見えた。名前だっけ覚えてのに苦労した。現地語には日本語に無い発音が多く、つまりのところ初めて聞く発音ばかりで、しかも同姓同名が非常に多い。病院のなかだけで「イクラムさん」が四人いる。こんな理由があるもんで、初めは誰がどの名前、どの名前の人がどの顔の人というのが全く分からなかった。当然すぐに現地語が話せるわけでもなく、彼等が話しかけてきた時は「わーっ。な……何か言ってる」と元気に笑顔、

内心ドキドキの状態、顔や名前を覚えていられる状況ではなかったという理由もある。

それも今となつては昔の話（といっても、ほんの二年前の話なんです）で、最近はそれこそ日本人の顔や名前よりもすんなりと、とまでは行かないまでも、夢にまで登場してくるくらいになったのだ。私の夢の中に現地の人々が登場し始めたという事は、ある意味で言うと、それだけ彼等との関係が深くなり、彼等の存在が私の心に残るものになっているという証拠である。……と思いたい。

「会計」の見せ場

ベシヤワール会の活動には何百人もの現地の人々が携わっている。我々の活動は彼等の活躍と信頼関係なくしては進行しない。病院でもそう、井戸掘りにしても農業にしても、そして食糧配給の際もそうだった。外国人が一切入国することの出来ないアフガニスタン国内、外国の戦闘機による空爆が続くなか、彼等は必死になって走り回り、食糧を配って回った。その活躍ぶりに対して感謝し感謝すると同時に、信頼関係構築の重要性を再認識し、ここまで彼らとの信頼関係を築いてきたベシヤワール会の先人達の努力に敬服したものである。

この信頼関係なるしろもの、構築するのも難しければ持続させるのも難しい。この関係を壊してしまう原因の一つとしては金銭的な問題があげられる。金銭的問題のなかでもまた凄惨な数の問題に枝分かれするのだが、要はこれらの金銭問題にぶつかりながら解決していくのが「会計」の仕事、



砂漠化したクナール川下流域

「会計」の見せ場なのである。と書く会計の仕事がかなり情熱的でかっこいい仕事に思われるのではなからうか……。しかし現実には情熱的なものを乗り越え、興奮しすぎて怒りを露にしなから対処しなければならぬ問題ばかりである。んー、やはり現実には厳しい。

「わーっ。な……何か言ってる」なんて言っていた頃が懐かしい（といっても、ほんの二年前の話

なんです、彼らの名前を叫びながら、彼等の顔をまじまじ見ながら、先人達の築いてくれた「信頼」の柱を壊さぬよう、今日も彼等の投げかける問題を解決すべく、……地下にこもって「確認作

現地語習得の道はるか

PMS現地連絡員 目黒 存

まずはコミュニケーション

ワーカーとしてなんの能力もないまま不安を抱えつつ現地を訪れ、約半年の間自分でもできることを探してもらいながら先輩ワーカーの方々と現地スタッフに少しずつ育ててもらいました。その中で敬遠していた言語の習得に関して、努力とか苦労といった当初思い描いたやり方とは違う道のりを歩んでいることに気付きました。

僕はこれまで、長い時間、感情のこもった日本語を聞きつづけてきました。家族や周りの人の問いかけに泣いたり笑ったり叫んだりして答えようと思いました。感情と感情のやりとりの中で言葉を覚えていったと思います。そしてまさにそれと同

業」に没頭するのである。

きょう私と同じセクションで働いている現地職員から、「昨夜、私とミスター・ナカヤマと一緒に教会へ行く（彼はキリスト教徒である）夢を見

じような方法で現地語や英語を少しだけ覚えていたのです。文法などほど遠く、難しい話もできませんが、とにかく相手と感情のコミュニケーションができるのが嬉しくて僅かな単語に表情や身振り手振りをつけて話しています。

気持ちと言葉がかみ合いました

日本人ワーカーのための現地語教室で教わった言葉が肉声として耳に残って言葉として口から出る機会をうかがっています。向上心が湧いたときというよりは、もっと伝えたい事があるときに本を開いています。自分の言葉の学習のスピードはとても遅いと思います。もっと努力や訓練をするべきだとも思いますが、それでも少しずつでもこうして気持ちと言葉がかみ合って言語を身につけている事に手ごたえを感じています。

現地での活動に関しても、自分は即戦力として現地に来たのではない分、ゆつくりとこの土地での生き方や考え方を学ぶように、もう一度子供の成長過程をなぞりながら現地に受け入れてもらっているように感じます。学齢期であることを楽しみながらいずれ成長して活動期になることを目指して、今のこの機会を与えてくださる全ての厚意に感謝しています。

たよ」と言われた。ん、彼の夢の中に私が登場し始めたと言う事は、ある意味で言うところ、それだけ彼等との関係が深くなり、私の存在が彼の心に残るものになっているという証拠である……と。

▼事務局からのお願い

振込票の記入は楷書で

*ご寄付をお送り頂いた郵便払い込み用紙の、皆さまの住所・氏名が判読できないことが時々あり、処理に苦慮しております。ご住所・ご氏名はできるだけ分かりやすくご記入頂ければ幸いです。

▼寄附をしていただく皆さまへ

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、御願いたします。

▼「聖愚者の物語」甲斐大策著

5月下旬ごろ刊行です

*昨年74号でご予約を募りました甲斐大策氏の「表紙絵をめぐる物語」をまとめた短編集の刊行が大変遅れております。すでにご予約の方は出来次第お届けいたします。何卒ご了承ください。

中村哲医師の本

辺境で診る 辺境から見る

新刊

【4月末刊】1800円

時代の本流を尻目に黙々と歩む中村医師。その果敢な思考と実践の軌跡。虚構に満ちた世界の中で、思考し、実践することとは何かを問う。

ドラエヌールへの道

【3刷】2000円

医者 井戸を掘る

アフガン早魃との闘い

【8刷】1800円

医は国境を越えて

【4刷】2000円

ベシヤワールにて

【8刷】1800円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
TEL 092 (714) 4838

ほんとうのアフガニスタン

1200円

光文社 東京都文京区音羽1-16-6
TEL 03 (5395) 8125

アフガニスタンの

診療所から

筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4
TEL 03 (5687) 2670

価格はすべて本体価(税別)です

●事務局便り

*三月二十日、圧倒的な軍事力を背景に米英軍はイラクに侵攻した。大義名分は幾度かすり代わりつつ「フセインの圧政から、イラク民衆を解放する」ことだという。開戦当初の名分は、査察に際せず、世界のテロリストによる危機を拡散させるイラクに対する制裁ということだった。アメリカという国は自分の影におびえるように外部に恐怖を妄想し、国益のため第三世界に先制攻撃を仕掛けてきた歴史を持つ国である(そのメンタリティーは、国内で銃器犯罪による死者年間一万一千人以上を生み出している)。

圧倒的な軍事力が「正義と民主主義」を装い、国際社会も戦争の是非には触れることなくそれぞれの利害で「戦後復興」を唱えはじめた。しかしアフガニスタンでの「戦後復興と民主化」を知るものとしては、その欺瞞に異義を申し立てねばならない。アフガンでもアメリカは「タリバン」の圧政からアフガン民衆を解放する」という名分をかけた。その結果もたらされたものは無秩序と軍閥の台頭である。

NGO、国連組織、各国政府機関が「復興事業」を始めてすでに一年が経過した。しかし難民帰還事業で帰された村は早魃で荒れ果て大半の村人は再び難民となつて隣国に舞い戻っている。復興資金が消費されれば、数年を経ず国際組織は撤退して行くであろう。この歯軋りするような無力感の中で私達は何をすべきなのか。答えはない。だが現地の人々にとって今必要なことだけは分かっている。私達は早魃に促されて井戸を掘り、カレーズを修復し灌漑井戸を作ってきた。そして今また全長十二キロの灌漑水路の建設に着手した。虚構に満ちた世界に抗するには、地を這うしかないのかも知れない。

ペ村から

♪

今春五年振りにベシヤワールを訪れました。久しぶりにPMSの旧友に接し、感激のひとつでした。十三年の知己のらい患者バーバーの元気な顔、またその奥様が見舞いに来ている、私を覚えてくれていたことにも感激しました。今回のツアーは総勢八名。札幌や東北の医大生、看護婦さんなど若者中心です。皆学習熱心で、毎夜一時間反省・学習会も行いました。九八年春の開院式ツアーにも参加し、再度十月にも行く予定でしたが病を患い叶わず、五年が過ぎてしまいました。さて、充実したPMS病院には驚きました。患者を大切にされた配慮も多く見られました。アフガン人、バキスタン人、日本人と一緒に、弱い人貧しい人の為に働くことがPMS及び中村先生の念願でした。一週間の滞在でしたが、現地スタッフの皆さんには大変お世話になりました。PMS病院のスタッフフリアフガニ・バキスタン・ジャバニが一緒に仲良く平和のために働き続けられるように祈っています。(林)

会 則

- ① 本会の名称をベシヤワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のバキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「文えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 役員の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARAH OUSE (〒八一〇〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇―二五 上村第二ビル三〇七号 TEL 七三二―二三七二) 内におく。